

高・大連携 理系人材を育成

国が指定する県内のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の第一・熊本北・宇土・天草・鹿本の5高校が9月、共同で事業に当たる「熊本サイエンスコンソーシアム」をつくった。最初の大きな取り組みは、高校生が大学と研究室レベルで交流する「高大接続」。12月20日に崇城大（熊本市西区）と協定を結び、理数教育のレベルを上げ、専門性の高い人材を熊本で育てる狙いがある。

13日、コンソーシアム事務局がある第二高（東区）

の化学室では放課後、化学部員4人が分光光度計で水の透過性の数値を計測していた。廃棄物を使った水の浄化が研究テーマで、炭化させたコーヒーやトウモロコシが実験の材料。2年の井出宗則さんは「大学の電子顕微鏡を使うことができれば、より詳細に炭の状態を見ることで研究レベルも上がる」と協定締結を歓迎した。



炭を使った水の浄化の研究に取り組む第二高化学部の生徒

13日 熊本市東区

先端技術触れ 研究者と交流

進路選択 継続してケア

とが多く、成果が見えにくい。そこで、県内SSHの5校はコンソーシアムを組織して、高校生の進路選択を継続してケアしていく考えだ。崇城大との協定はその第一歩で、企業への就職や研究者への道づくり、それ以降のキャリアアップのフォローも視野に入れる。崇城大からは生物生命学部など全5学部が参加する。高校生が先端技術に触れ、研究者と交流することで、理数系分野への関心をさらに深めてもらいたいとしている。松下琢副学長は「高校から大学まで7年間の成長のプロセスを可視化し、ハイレベルな人材を育てていきたい」と話す。

重点的に理数教育を行うSSHには、国からの資金が提供される。しかし今回目指すのは、国だけに頼らず、教育機関や地場企業など地域で人材を育てるために「自走」する仕組みづくりだ。事務局の田中知史教諭（40）＝第二高＝は「新たな感染症に対応するワクチン開発やICTを活用したスマート農業など、熊本には理数系の人材が貢献できる仕事がたくさんあることを高校生に知ってほしい」という。

事務局は、5校以外にも、理数科・コースがある高校や理数教育に力を入れる高校にも高大接続への参加を呼び掛けている。田中教諭は「菊陽町には半導体製造最大手の台湾積体電路製造（TSMC）も進出し、注目されている。地元にある進路の選択肢を示すためにも高校と大学、企業が連携する必要がある」と力を込める。

（澤本麻里子）